中国における「池田思想」研究の動向

高　橋　　強

1）　2004年10月、北京大学で「池田研究」国際シンポジウムが開催された（北京大学「池田大作研究会」と東洋哲学研究所の共同主催）。これには主催団体のほか、湖南師範大学「池田大作研究所」、安徽大学「池田大作研究会」、中国文化大学（台湾）「池田大作研究センター」、今年３月に開設されたばかりの肇慶学院「池田大作研究所」および本学・創価大学等、16の学術機関から代表80名の学者が出席した。以下、提出された池田研究に関する論文の要旨を紹介する。（当日配布された「論文集」の目次順）

「池田大作の政治観およびその実践」王新生（北京大学）

池田は1964年、創価学会を母体とした政治政党である公明党を創立した。彼は同党の創立の意義について、次のように述べている。

> 政治の目的は、大衆の生活レベルの向上にある。日本の保守政党は、大企業や大資本家の代表であり、真の大衆の味方としての大衆の代表ではない。公明党は真の大衆政党を目指し創立された。大衆社会の到来とともに、階級闘争というやり方で社会を改革するという可能性はもはやない。日本の革新政党の基礎は大企業の労働組合であるが、社会的救済を必要としている広大な大衆はその外に放り出されている。創価学会の会員はまさにこの層に属している。従ってこの層を社会的基礎とする公明党は、真の革新政党であり、新しい時代の新革新政党である。（略）公明党の母体である創価学会は、一つの宗教団体であるが、真の民主政治や、平和で幸福な人類社会を創造するためには必然的に政治に関わらなければならない。

執筆者はこの点に関し、「池田の当時の日本社会の発展に対する判断は正確で、創価学会および公明党の位置付けも適切なものであった」と評価している。

池田はその後の政治実践を通して、同党の政治理念を「中道政治」であるとし、内容を次の５つの観点から説明している。１、仏法の中道主義を根底とするがゆえに、生命の尊厳、人間性尊重に立脚する。２、信頼と調和による新しき社会建設を目指す。３、真の民主主義を実現する。４、個人の幸福と社会の繁栄を一致させ、真の大衆福祉を実現する。５、「戦争なき世界」恒久平和を実現する。

執筆者は、公明党はこの中道主義政治により「縦横無尽に自らの政策を調整することができ、影響力を強め、次第に連立政権への道を歩む足固めをしていき」「今日では政権与党として、日本の政界で活躍している」と述べている。

創価学会の発展と公明党の躍進は、反対勢力から「政教分離」上問題があるとの指摘を受け始めた。池田は次のように明確に述べている。

Tsuyoshi Takahashi（創価大学文学部教授／副センター長）

創価学会はあくまでも生命尊厳、平等、自由という民主主義の原理を実践し、民衆の真の味方として慈悲と道理による布教を図ってきたのであって、また今後、いかに発展したとしても、多数の力や権力をもって他宗教を圧迫し国教化するようなことは全くありえない。（略）創価学会と公明党の関係は、制度のうえで明確に分離して行く。選挙に関しても、公明党は党組織を確立し、選挙活動は党組織の仕事として明確に立て分けて行く。

執筆者は最後に、「池田大作の政治観およびその実践は、創価学会および公明党の発展を推進しただけでなく、日本の政治にも大きな影響を与え、その構造と性質を少なからず変えていったのである」と結んでいる。

「池田大作の世界平和観を論ずる」蔡徳麟　楊君游　蘇衛平（清華大学深圳大学院）

池田の世界平和観は、仏法人道主義の基礎の上に確立されたもので、３つの主たる特徴をもっている。第１は積極的平和主義、第２は絶対的平和主義、第３は徹底的平和主義である。第１においては、平和とは「戦争の間欠」ではなくして「暴力の根絶」なのであるとし、「直接的暴力」と「構造的暴力」の根絶を提唱している。第２においては、善悪を判断する基準は相対的なものであるが、生命尊厳の擁護は絶対的な基準であると考え、戦争を絶対悪と断じている。第３においては、「宇宙生命論」から出発して、人間の自然に対する破壊は即ち生命に対する虐殺であり、戦争の社会に対する破壊もまた生命に対する蹂躙であるとする。これら３つの特徴は相互不可分の関係にある。なぜならば、それらは仏法人道主義という共通の哲学的基盤をもつからである。

池田の仏法人道主義の哲学的基盤は、生命至上論、宇宙生命論、天人合一論にある。彼はまず、生命の価値性、尊厳性、および不可代替性のゆえに、生命を大切にし尊重するよう訴えている。なお生命の尊厳性は、他者に対する生存の権利の尊重と、自身の使命感と理想の追求という二面性を有する。次に、生命の尊厳性とは、単に人間だけを指すのみならず、宇宙全体および世間の万物や自然界の微生物や無機物を含めたものであると述べる。もし人間のみを尊重するならば、人類をエゴイズムに陥れることになるのである。更に、彼は、自然界とは人間から完全に独立し、人間と懸け離れた客観的な存在ではなく、人間と融合して一体をなしている「天人合一」、「依正不二」の存在であると訴えている。

池田の世界平和観は、壮大で特色に富んだものであるが、更に注目すべきは、彼が終始一貫して世界の恒久平和を実現するという目標に向かって実践しているという事実である。彼が世界平和の推進と実現のために提起した「提言」や「プラン」は、数えきれない。

例えば、彼はジョゼフ・ナイの「ソフトパワー」「ハードパワー」に関する表現法を、時代的特徴にまで高め、独自の見解を提起している。また“人類益”という意識をもった世界市民を育成し、その連帯を広げながら、「国家主権」から「人類主権」への転換を推進している。更に国連の「人類の議会」としての役割強化を主張し、国連中心主義を草の根レベルでその影響力を拡大させている。

「池田大作の生命詩学を論ずる」譚桂林（湖南師範大学）

池田が一瞬も絶え間なく詩を読み、詩を詠い続けているのは、個々の生命の中にある感謝と歓喜を、また個々の生命が万物と融合する宇宙と通じ合うと言う、生命の体験を表現する為である。

池田の詩学の哲学的基礎は３つある。１つは「法華経」で、２つ目は儒教の「天人合一」思想で、３つ目がベルグソンの「創造進化論」思想である。

池田は、現代社会の悲劇状況は、自然と人間との分断、民族と民族との分断、人間と人間との分断にあると考える。彼は、これらの分断を修復し、分断から発生する孤独感および憂慮感を解消する任務を、仏法に賦与している。と同時に、同じ責任を担うものとして詩を提起しているのである。それは彼が、宗教と芸術が精神的に通じるものと確信し、詩の持つ力と、詩と生命とは緊密に通じることを実感したからである。詩人の魂は、創作活動を通して、宇宙生命と呼ばれる「統一実態」と繋がり融合しあい、有限のものを無限のものに拡大していこうと渇望しているのである。

池田は詩歌の働きは、宗教哲学のように、人類生命の「ソフトパワー」を開発することであると述べている。現代社会において、それを開発していく上で「内発的」要素が重要であると指摘している。そしてその「内発的」要素とは、カントが述べた「人の生命の中に存在している道徳律」であり、人間精神の自立や自我を抑制する心である、と同時に、人間が如何に外在世界を感応するかを決定づける核心的な力である、と説明している。

池田は、特に人間性を復興させる為に、「詩心」の重要性を提起している。その理由として３点あげている。１つは、詩は功利主義とは無縁であるから、詩心がある人間は、氾濫する物欲に立ち向うことができるという事である。２つ目は、詩は自然と通じ合うものであるから、詩心がある人間は、宇宙万物の生命と融合しやすく、和やかに共存できるという事である。３つ目は、詩は「愛、善、美」を内容としているので、詩心がある人間は、慈悲深く、生命を尊重するという事である。

執筆者は、池田は生命論の視点から詩を論じ、詩を詠じていると述べ、独自の「詩心」を純粋な詩学的問題から、人類の精神革命思想の問題にまで高めていると評価している。

「生命の尊厳―池田大作の人間学思想」王偉英（北京華文学院）

池田の人間学思想の内容は大変に広範で、如何に彼の豊富な論述の中から、その思想体系を完全に正確に把握すればよいのだろうか。池田の人間学思想の核心は“生命の尊厳”であると考える。これは彼の思想理論の重要中の最重要で、核心中の核心で、この大筋を把握することにより、池田の全体的な思想体系を正確に把握することができる。

この“生命の尊厳”は、複合的理念で、以下の４つの観点を包括する。第１は、生命の平等観である。まずそれは、人間と自然の関係は平等であると強調する。全ては生命的存在であり、侵すことのできない尊厳である。つぎにそれは、人間と人間の関係は平等であると強調する。

第２は、生命の価値観である。生命には如何なる等価の物も存在しないが故に、生命の尊厳は最高至上の価値を備える。池田は、我々は如何なる状況下においても、他人の生命と自身の生命を大切にすべきであると強調する。

第３は、生命の革命観である。人類は如何にして生命の尊厳を実現するのか。その回答はただ一つ、即ち人間革命を実行することである。人間は社会的存在で、人間と人間が構成する社会的ネットワークの中で、自身の生命の尊厳を実現する為には、まず他人の生命の尊厳を守ってはじめてそれが可能で、自身が他人の為に存在してはじめて、他人も自身の為に存在するのである。他人の生命の尊厳を守るには、まず自身の人間性を改造しなければならない。

第４は、生命の実践観である。池田の人間学思想は、口頭だけの理論ではなく、実行の理論である。実践は彼の思想理論の最も重要な特徴である。“生命の尊厳”は理論の問題にとどまら

ず、更に重要なことは実践の問題であり、革命の問題である。真に人間の尊厳を実現するには、その内在的前提は人間革命であり、外在的前提は社会革命である。この二つの革命を完成させるには、多くの人々の革命的実践がなければ、達成できないのである。

他方、池田の提起する“生命の尊厳”に関する学説は、西洋の人道主義に対する反省と整合でもある。この視点にたつことにより、彼の学説の思想的意義と理論的価値が認識できる。

「心の詩―池田大作の撮影作品を評する」範廷義（広東省肇慶学院）

一生をかけ“対話”を追求している池田は、自然との対話の中で尊重、平等、理解という愛の心を持ち、自然を一定規律のある“生命的存在”と見なしている。彼は、人類の目的は自身以外の自然をごう慢に支配するのではなく、自然と協調して生存すべきであるという信念を持つことである、と考えるので、彼の作品の中では自然は、純粋で調和がとれ、優美で親しみがあり、山水や都市風景であっても強い生命力や積極的に向上しようとする進取の気概を包括している。彼は撮影を通して、人々に平和で心豊かな世界を開かせようとしている。

彼のこのような人生の信念が、彼の眼中にある自然を彼の人格精神に染めるので、彼の撮影作品は、青春の活力を露呈している。彼は明確な人生理念を抱き、人間社会の諸問題と未来展望に関心をもち、人生理念の実現の為に奮闘努力し、困難に直面しても楽観的精神と必勝の闘志を堅持している。

美感の境地の実現は、一人の人間の智慧、感情、意志の内在する全ての心理構造が創造する過程である。主体が自然の対象物を凝視する時、自覚はしないが自身の愛憎、情感、意志ないしは全生命の息吹きは対象に注がれ、主体・客体が高度に融合する中で、物と我とが一体化した芸術境涯が達成され、観察中の対象は生命化、情感化、人格化する。池田は、愛の心を抱き、満腔の情熱をもって人間の発展に関心をよせ、自身の生命から湧現してきた慈悲の一念を、鏡とし、万物を照らし、自然の景色を借りて胸襟を描き、自身の情感を客観的景色に傾注している。

池田は職業的撮影家ではなく、意識的に芸術創作の為にあるいはある種の境地を追求する為に撮影しているのでもないが、自然と期せずして遭遇し、他人が普通だと思う景色の中にでも、美的存在を発見する。ロダンは「所謂大師とは、自身の目で他人が見過す物を見い出し、他人がありきたりでとりたてて珍しくないと思う物に美を見い出す、このような人物である」と言う。

池田は、彼の芸術的才能と内在する強烈で高尚な思想や感情を彼の撮影作品に浸透させ、全ての作品は一つの独立した天地を構成し、彼の思想や情緒に符合している。静寂な山や丘、雨後の虹、茂った大樹、平静な道、咲き誇る花々、秋の紅葉、閑静な池は皆彼自身の心と智慧の果実であり、豊かな神聖な精神と活力を包括している。

「池田大作の教育倫理思想」黄富峰（湖南師範大学）

教育の目的について。池田は、教育の根本的課題は人類は如何なる存在なのか、人生を如何に生きるかに対し、回答を与えることであると述べる。しかしながら現実の教育は、功利を重視した教育であり、教育のあるべき目的を軽視している。従って教育を活性化させ、教育を人間の総合的発展を促進させる重要な手段とする為に、教育は根本的な目的から出発し功利性を超越し、人生を創造する潜在力を養成することに着眼し、人間が徳性を不断に創新するようにしなければならない。池田は、知識だけでは人間に対し創造的機能をもたらすことはできない

が、知識を如何に運用するかを通して、即ち智慧を通してはじめて、創造性をもたらすことができるのであるが故に、教育の目的は知性の創造にあると述べている。

教育内容について。池田は、現代教育は功利主義と適応し、教育内容において純粋知識の教育を重視し過ぎ、学生に対し技術訓練を進行させ、人文的な素養、即ち徳性や人格や潜在力の養成を疎かにしていると考える。従って、未来社会を開くということは、人文科学的な教養と全体的観点を備え、かつ科学技術の運用に熟練した人材を養成することであると主張している。

教育方法について。池田は、学生を自由に発展させる権利を有する個人と捉えかつ個性の自由を尊重し、「教育は、その異なった性格の個人を対象とし、その一人一人の生命は瞬間瞬間微妙な活動をする」と述べる。その上で池田は、教師という職責は、人を発掘し、人を育て、自身の豊富な学識と高尚な人格で、学生に影響を与え教育することである、と考える。そして「師弟の出会い、師弟の情と友誼は最も崇高な人生の精華である」ととらえている。

教育制度について。池田は、機会均等で公正独立の教育制度こそが、教育の健全な発展を促進すると主張する。その為に、第１に「国家権力から離れた独自の立場で組織されるべき」で、第２に、経費は国家からの負担であるが、国家は具体的教育内容には干渉せず、第３に、国際的な教育交流と協力を促進する必要性を強調している。

「多国籍企業の発展と平和文化経営理念―池田大作平和思想―」林彩梅（中国文化大学）

池田の平和思想は、国際創価学会（SGI）の活動の中に見い出すことができる。即ち「人間主義」に基づいて「世界市民理念」、「寛容の精神」、「人権尊重」を主張し、非暴力で対話し、人類が直面する課題の解決に取り組んでいる。

池田は「人類の幸福と世界平和」に関心をもち、世界各国を訪問し、各国の指導者、教育者、文化人等と対談を重ね、そこでの共通認識の内容は貴重な「平和思想」を提示している。

例えば、「人類益」優先理念、「世界市民」理念、子供達に「健康な地球」をといった思想、「教育立国」「人権立国」は「千の軍隊より強い」といった観念、「菩薩道の組織」等の構築、また「他民族との調和」の智慧、「平和の準備」の必要性等、枚挙にいとまがない。

多国籍企業の海外異文化管理において、その企業リーダーに必要な経営理念は「平和文化経営理念」である。同理念の構築に際し、池田の平和思想は極めて有益な示唆を与えている。執筆者は以下の10の観点より、その構築を試みている。即ち、１．慈悲と智慧による執行能力、２．勇気と正義の精神、３．世界市民の理念、４．「王道文化」に基づく管理、５．「企業は人なり」の精神、６．「仁愛」による他民族との調和と国際協力、７．法律は「裁く法」でなく「救人法」の精神、８．寛容精神による企業道徳、９．「人道主義」による国際協力、10．「菩薩道の組織」構築である。

「池田大作の童話創作について」喬麗媛（広東省肇慶学院）

池田の童話は、その場の調子に合わせて作ったものでなく、またお茶や食後にくつろいでの自身の娯楽でもない。それは彼の社会的指導者の鋭敏さをもって、今日世界の児童教育の危機や童話発展の奇形的状態を見通して、伝統的な“童話教育”の“復興”を主張した壮挙である。彼が表現した使命感と責任感は、転換期の紛争、“新世代”の出現を経験し、コピーグラフィック芸術の強力な衝撃の下、伝統的な“童話教育”を放棄し、所謂“遊戯的品格”“娯楽的機能”を一方的に追求し、極端な一方から他方の極端さに走った中国の童話界にとって言うならば、かなりの覚醒と震撼的機能を有した。

池田の描く“子供達への勤勉、勇敢、智慧、悪を懲らしめ善を讃える教育”、即ち“東洋文学の教育機能”に富む童話は、伝統的な“童話教育”に対する“挽留（引き留め）”で、その再構築された童話の価値体系の意義は、その本文中の倫理や美学を遥かに超えている。作家出版社が近年推薦した世界少年児童文学名著叢書『世界名人童話集』には、池田と古典童話の大家・アンデルセンとグリーンが並列されており、池田の童話に対する高い評価が示されている。

池田の童話作品には深い意味が込められており、作者の人類境遇に対する深い思索が凝結され、彼の人間を本とし、人間性を愛し、生命を慈しむ“人間学思想”が貫かれ、東洋の人道主義の光が輝いている。これを中心として形成された童話の価値体系には、“人間”の主体性が強調され、“平和”が生死にかかわる重要な意義を持つことを明らかにし、“人間としての振舞い”の最高の評価基準である博愛と平等を説き明かしている。

池田の童話創作が“教育”の機能を注目しているということは、道徳精神を欠いたいくつかの童話への反駁である。ここでいう“教育”とは、冷たいありきたりの“教訓”ではなく、“寓話的面白み”のある美感的に楽しむ方式である。そこに構築された審美的価値体系は、標準書と称される。池田は、所謂童話世界は難しい道理を用いないで、“完全な像形”を用いて人間に関する生活方式、人生の意義、事物に対する善悪の分別を教えるものであると述べている。彼の描く童話の像形、人体、擬体、人間を超えた人のあらゆる類型に、それらが完全に規範化されている。

「“立正”而“安国”—池田の“人間学”思想の特徴」冉毅（湖南師範大学）

池田は、宗教思想家として20世紀人類の危機を感じ、人類未来の前途に対し憂慮し、宗教の視点から現代文明の危機に対し、根本的には“人間の危機”、“人間性喪失の危機”であり、その危機治療の根本的“処方”は精神革命或は人間革命であると述べている。従って“人間革命”は池田の“人間学”の根本として、人格的人間主義思想の特徴を明示し、この特徴を日蓮の言葉で言うならば“立正”而“安国”となり、また中国伝統の哲学の言葉で言うならば“内聖”而“外王”となるでろう。

伝統的な“立正安国論”或は“内聖外王論”は、一般的に３種類のモデルを包括する。（１）“立正（内聖）而安国（外王）”、（２）“立正（内聖）即安国（外王）”、（３）“立正（内聖）与安国（外王）”である。三者を比較すると、池田の“人間学”は（１）に属すると思われる。

池田の提唱する“人間革命”は、一つの内在的精神革命であるが、その主要な内包は知識が豊富ということではなく、人格の向上ということにあり、またその人格の意味する所は、伝統哲学が意味する単純な道徳的人格とは異なり、“智慧”を特徴とする全面的人格で、言い換えるならば、この種の人格体系においては、道徳は無論人格の主体的部分を構成するが、科学的知識の人格完成に対する意義を排除していない。その上、その道徳的人格の達成と宗教や信仰が連携している故に、池田の人格の内包は理性に限られず、非理性も含まれる。池田のこの種の人格内包多元構造は、一方において“人間学”の全面性を豊かにするだけでなく、他方においては現代文明が作り出した一方向的人格に対し一種の対症薬である。池田が強調し現実に対し推進する“人間革命”思想は、更に我々に対し、一種の進取の気概ある、不断に価値創造する人生モデルを提供している。

「人間革命と環境保護—池田大作の環境保護観」曽建平（湖南師範大学）

国際的な宗教思想家、社会活動家としての池田は、環境保護問題に強く関心を持ち、その上、

それを人類の現実変革と未来発展の重大な問題と見なしている。彼のこの問題に対し表明している環境保護思想は、深厚な人間学的基礎を有しており、彼の環境倫理思想は人間性変革の重要な構成部分である。この思想の突出した特色は、生態の危機は即ち人間性の危機、自然の救済は即ち人類の救済、環境保護には人間性の変革が必要であるという観点である。

生態の危機は即ち人間性の危機について。生態の危機は決して孤立した自然現象ではなく、人間学が背景にある深刻で複雑な問題である。池田は、生態の危機は“外在的破壊”“天災”のように見えるが、実際は“内在的破壊”がもたらした結果で、“天災”という形式で現れた“人禍”であるという。池田は今日の生態危機の背景として、人類の持つ自然征服観念、科学技術万能観念、“魔性的欲望”の膨張をあげている。

池田の自然破壊の原因に対する分析が意図するところは、人間性とは世界に対する態度で、反映されているものは、人間と周囲の生命、人間と人間との関係であるので、人間性の改変は世界に対する態度の改変であり、人間と周囲の生命、人間と人間との関係の調整であり、言い換えれば、生態の困窮を救済する方途は、外面の科学技術の力に関心を向けるだけでは不可能で、自身から原因を探し、“人間の革命”を進めることが必要である、ということである。

自然の救済は即ち人類の救済について。池田は、自然界や地球は人類が共同で生存する唯一の場所で、人類は征服者ではなく、平和の心をもって自然の前にあるべきだと考える。池田の理解している自然の価値は、自然が有している人類の生存や発展に対する支持力や維持力である。人類の行為がこの種の力を破壊するということは、自然の価値を損なうことで、人類の前途を損なうことである。それでは自然の価値の縁はどこに存在するのか。池田は、縁は人間と自然の間の“一体不二”からくる関係であると考える。仏法の“依正不二”の原理である。

環境保護には人間革命が必要であるということについて。池田は、“依正不二”の原理に基づき、人間と自然の関係の主要な内容は相互依存であると主張している。従って科学技術が環境問題解決の最後の方途ではないと見なしている。彼の現代文明社会改革の基本的構想の順序は、最初に現代的哲学、宗教を確立し、次にそれを基礎としての意識革命（その根本は人間性の革命）、その次に組織や社会等の変革である。

「池田大作の現代教育観」曽崢（広東省肇慶学院）

池田の現代教育思想には、主として教育の目的観、現代の教師観、現代の大教育観等が有り、それが形成するトータルな教育思想とは、「幸福の為の教育」の理念を体現したものである。

教育の目的観。池田は、教育とは「人間」を育てる事業であり、未来を開拓し、未来を築く主体は「人間」であって、その「人間」を育成するのが教育であり、「人間として如何にあるべきか、人生をどの様に生きるべきかという、人間にとって不可欠の問題を解明し、解答を与える所に、その根本的課題がある」という事に人々は気付くべきであると考える。池田は更に、現代教育の本質ならびにそこに存在する実利主義の弊害を分析し、教育の根本は子供たちの為であって、「国家の専有物」ではないと指摘する。

現代教師観。池田は、教師を教育の主要な条件であり、また最も重要な「教育環境」であると見なし、教師は学生の成長にとっての重要な役割を演じるものであると考える。教師は、教育がその価値を実現できるかどうかの鍵を握る人間自身の進歩の促進者であり、また人間幸福の創造者であるとも考えている。池田は繰り返しこう強調する。「教育が、どこまでも人間を対象とし、しかも多くが、未来を担う青少年の動向を決定するものであるだけに、それに携わるあらゆる機関も教師も溢れんばかりの情熱と、確固とした教育理念をもっていなければならな

い」と。

現代の大教育観。現代の大教育観とは、教育の社会化と社会の教育化を強調するものである。教育の社会化とは、即ち教育はすでに教育自体の系統内の事業だけの存在ではなくなってきているという事である。また社会の教育化とは、社会がすでに一つの完全なる意味における家庭、学校、社会の三位一体の教育体系を構成しているという事を指す。池田の提唱する教育に関する主張は、狭義的な学校教育という時空の概念のみにとどまるものでなく、家庭教育、社会実践、終身教育等といった大教育の概念である。

池田が数多くの著作において体現している現代教育思想は、牧口常三郎の人間主義教育観を継承し、発展させ、止揚したものである。

２）　同シンポジウムを主催した北京大学「池田大作研究会」は、2004年６月に『池田大作論文集』（香港社会科学出版社）を出版した。内容は以下の通りである。

「池田大作の日中提言について」劉德有
「池田大作の人生論探求」賈蕙萱
「池田大作の人生哲学論」劉光宇
「池田大作の生命論」王偉英
「池田大作の“生死不二”人生論」冉毅
「世界平和の積極的提唱者、擁護者―池田大作の平和主義思想」高海寛
「池田大作の平和観」丁闘
「池田大作：平和な世界を目指し」馮昭奎
「仏教史上傑出した宗教者―池田大作の宗教観」張可喜
「池田大作の仏法論」郭剛
「池田大作の教育思想」賈蕙萱
「池田大作・創価学会・社会機能」王新生
「公と明―与野党の視点から見た創価学会」賈蕙萱
「創価学会と中日友好」董武
「池田大作その人」李燕
「池田香峰子」賈蕙萱
「『人生地理学』と中国」高橋強
「牧口常三郎と『人生地理学』」張昌玉
「愛心」王宝祥

３）　なお同シンポジウムに参加した賈蕙萱教授と董武・助教授は、本研究センター「創価教育研究」（第３号、2004年３月）に論文**「池田大作先生と教育」（賈蕙萱）**、**「池田大作先生の生命論」（董武、王偉英）**を投稿している。

更に湖南師範大学「池田大作研究所」研究員の**曾建平**教授は、2004年11月に本務校の江西師範大学で**「池田大作―その人その業績その思想」**と題し公開講演をしている。

４）　2004年３月、広東省にある肇慶学院で「池田大作研究所」が開設された。顧問は広邦洪学長と曽崢・副書記、所長は喬麗媛・助教授、副所長は範廷義・助教授と李玉秋・助教授、管

理は馮海志・助教授で、その他の研究員を合わせると９名で構成される。池田博士の平和、文化、教育思想と、人間主義に大いなる啓発を受け設立された。

１年後には個々人の研究成果を発表し、３年後には池田研究国際シンポジウムを開催し、５年後には論文集を出版する計画である。現在「池田大作の婦人観の研究」が同学院の科学研究課題とされ、陳愛香研究員を中心に進められ、今年「池田大作と中国」と題するテーマで、広東省の科学研究課題として申請する計画である。

５）　本学においても中国の学者が、活発に「池田研究」の成果を発表している。

2004年５月、「中国から見た『池田思想』」シンポジウムが開催され、以下の論文が提出され論文集「平和・文化・教育」（創価大学平和問題研究所アジア研究センター、2004年）に掲載された。

「池田大作の『人間革命』における教育思想」胡華忠（復旦大学）

「池田大作と中国文学」潘鈞（北京大学）

「人文の視点から見た自然観―池田大作の環境保護思想」李培超（湖南師範大学）

「池田大作に見る『中道人間主義』思想」関志鋼（深圳大学）

「池田大作の道徳教育思想の特徴」王麗栄（中山大学）

６）　更に2004年12月３日、南開大学周恩来研究センター所長の**孔繁豊**教授（同大学副学長）が、**「周恩来総理と池田大作会長の歴史的会見」**と題し本学にて講演を行った。